

經濟論叢

第146卷 第1号

伊東光晴教授記念號

献 辞	菊 池 光 造	
中国農村地域における電気通信の発展	山 田 浩 之	
	西 村 周 三	
	直 江 重 彦	1
ソ連の石炭産業の再編	大 津 定 美	17
費用便益分析の厚生経済学的基礎	岡 敏 弘	35
A. セン潜在能力の経済学とケインズ革命	池 上 惇	55
現代の産業システムと情報ネットワーク	浅 沼 萬 里	74
メンガー『経済学原理』の成立	八 木 紀一郎	97
「産業構造」と価格分析	瀬地山 敏	124

伊東光晴 教授 略歴・著作目録

平成2年7月

京都大學經濟學會

メンガー『経済学原理』の成立

八 木 紀 一 郎

I メンガー・ペーパーズ

昨年（1990年）の5月から6月にかけて，私はデューク大学に滞在し，その図書館に保存されているメンガー・ペーパーズを調査することができた。これは，経済学者カール・メンガー（Carl Menger）がのこした膨大な遺稿群にメンガーの出版物やメンガー宛の手紙など，関連資料がつけくわえられたものである。メンガーの同名の子息数学者カール（Karl Menger）は，父の死後ほどなくして，遺稿を含む父の著作集の刊行を計画したが，第2版『経済学原理』を世におくりだしただけに終わった。しかし，彼はこの企画の挫折後も，この資料群を生涯をととして，細心の注意を払って守り続けた。それが，1985年の彼の死後，その相続者によって，優れたマニュスクリプト部門をもつデューク大学パーキンス・ライブラリに寄贈されたのである¹⁾。

日本の経済学史研究者の多くは，経済学書のコレクターとしても知られたカール・メンガーの蔵書が一橋大学にあることを知っている。それは，1921年のメンガーの死の翌年に，遺族の生計を支えるために売却されたものである。遺稿の方は，なお十数年ヴィーンにとどまったあと，合衆国の大学に移った数学者カールにしたがって大西洋を渡った。デューク大学に寄贈されるまでは，こ

1) この資料の概要は，デューク大学に1988年に滞在した馬渡尚憲教授によって，日本の学界に伝えられた（馬渡〔1988〕）。デューク大学は，これにちなんで「カール・メンガーとその遺産」というシンポジウムを1989年4月におこなったが，その報告書である Caldwell〔1990〕にも，Mason Barnett によるこの資料の紹介がある。この資料の出現前の資料的状況については，八木〔1983〕を参照されたい。本稿を公表するにあたって，マニュスクリプトからの引用の許可をいただいた Prof. Eve L. Menger（Univ. of Virginia）とデューク大学パーキンス・ライブラリ，調査期間中激励をいただいたデューク大学の Prof. A. W. Coats と Prof. Craufaud Goodwin，また，1989年シンポジウムの報告書のいくつかの章を刊行前に読ませてくれた Prof. Bruce Caldwell に感謝します。

の遺稿群は、その所有者を除けば、ごく僅かの人²⁾の眼にふれたにすぎなかった。最晩年になって、数学者カールは、これらの資料群をもとに父の伝記を執筆しようとしただけでなく、遺稿の一部の公表も許可しようとしていた。だが、この企画³⁾もまた彼の死によって挫折したのである。

この遺稿群の大部分——特に晩年の遺稿——の状態については、1930年代にLSE版メンガー著作集を編集したハイエクが次のように述べている。

「非常に多くのものが、広範ではあるが断片的かつ整頓されていないマニエスクリプトの形で残されている。それらは、きわめて有能な編集者がきわめて時間のかかる作業を辛抱強くやりとおさなければ、とても近づけるものにはなりえないであろう。」⁴⁾

今回の調査の中でも、私はしばしば、子息カールやハイエク、ズラビンガーなどによる整理や解説作業の跡に遭遇した。多大な時間がそれらの作業に費やされたことは確実である。しかし、それらは、1930年代のハイエクの見解を実証するものであった。

それでも、現状の草稿群のなかでも、比較的近づきやすい部分は存在する。ノートになったものや、自分の著作に書き込みをほどこしたものは、整頓されていないルーズ・リーフの集積に比べれば、まだましである。特に初期のノート群は、『原理』初版の準備という共通の性格を持ち、執筆時期が特定できるだけでなく、また字体も、後期のノートのようなぐり書きではないので、比較的読みやすい。したがって、メンガー・ペーパーズの調査の成果を求めようとすれば、水が低きにつくように、初版『原理』にいたる資料群に手が伸びるであろう。しかも、その主要部分をなす、1867/68年のノート群は、子息カ

2) 1930年代にメンガー著作集をLSEの稀覯文献リプリント・シリーズで実現したハイエクは、それに先だって、これらの資料群（の一部？）を一覧している。特に彼は、『方法論研究』へのメンガー自身の書き込みをもとに、その改訂版を作成しようとしたらしく、その準備稿がこの文書類のなかにのこされている。

3) ミュンヘンのPhilosophia Verlagは1980年代初頭にK. R. Leube/A. H. Zlabingerの編集になるInternational Carl Menger Libraryという双書を企画した。その案内では、子息カールによる父の伝記とともに、メンガーの未公表の政治・社会論集も予告されていた。

4) Hayek [1934], S. XXI.

ールがその存在について言及した⁵⁾ ことのある、メンガー研究者にとっては‘幻の資料’だった。

以下では私は、メンガー・ペーパーズの資料に、既存の資料や研究成果を加えて、メンガーの『経済学原理』の形成過程について論じたい。メンガー・ペーパーズには、『原理』の草稿自体は含まれていない。それはおそらく、初版『原理』の印刷の前後に廃棄されたのであろう。メンガー・ペーパーズの資料は、執筆段階より前の段階、つまり、既存の経済学関連文献を博捜しながら、自分の考えを形成していった段階のものである。しかし、この段階でもメンガーはすでに、財効用の主観的評価にもとづいた消費選択理論と交換理論に到達しており、理論の改革者として登場している。したがって、『原理』の草稿自体の出現を望み得ないとすれば、『原理』の成立について論じるべき時機はすでに到来しているのである。

しかし、1871年以前の草稿類にかぎっても、各100ページ前後の25冊の中型小型のノート、おそらく同様のノートの断片、2冊の大型ノート、ルーズ・リーフ状の草稿少々、そして手紙などの関連資料、と数え上げていけば、かなりの分量になる。それらは、既存の経済学関連書からの抜粋のなかに随所に自分の見解が書き留められたものが多いので、私の調査は、それらのページをめくりながら、メンガー自身の見解らしきところに目をとおしたにとどまる。さらに、手書き草稿の解読の困難さはいうまでもない。完全な調査とは、とてもいえない。

第2の問題は、『原理』準備期・執筆期のメンガーの生活についての私たちの知識の貧弱さである。たとえば、学界に入る前のメンガーがジャーナリストの経歴をもっていたことは比較的よく知られているが、いったいどのようなジャーナリズム活動であったのかという具体的な情報は欠けていたのである。メンガー・ペーパーズには、1875年に記入の開始された小型の日記が含まれ、その始めの方のページのいくつかは、それ以前の生活についての備忘録的な整理

5) K. Menger [1923], S. VI; [1973], p. 44f.

にあてられている。この資料も制約のあるものであるが、次の第2節では、それを手がかりにして、『原理』準備段階のメンガーの活動と彼の知的関心を簡単に紹介しよう。

その次の第3節では、1867-68年の時期のメンガーの経済理論の探求をいくつかの項目にわけて概観する。第4節は、『原理』への接近をその構成プランの面からフォローする。最後の節は、『原理』準備期のメンガーの方法論的な立場をさぐることにあてられる⁶⁾。

II 『原理』準備期のメンガー

「1867年9月 経済学に身を投じる。ラウその他を勉強する。

1868年	}	自由になったり, Debatte 紙, 後には, Tagespresse 紙にいた。
1869年		これをやめて, また自由になる。1868年秋—1869年2月まで
1870年		Ungar の Volkszeitung。それから, また自由。自由な期間は, 自分の『経済学原理』を執筆する。」(10)

.....

これは、前節で言及したメンガーの「日記」(Tagebuch)の第10ページの一部である。この「日記」は、『原理』の執筆過程については触れることがほとんどなく、これが唯一の記述である。

従来の研究との関連からみて興味深いのは、経済学の本格的研究の開始にあたって手にとった経済学書としてラウ (Karl Heinrich Rau) があげられていることである。一橋大学メンガー文庫には、メンガーが詳細な書き込みをほどこしたラウの『経済学原理』第7版がのこされており、エミール・カウダーは1960年代初頭にその書き込みを解説しているからである。カウダーは、それを『原理』の最初の草稿ではないかと考え、一橋大学図書館はこの示唆にしたが

6) 本稿では、紙幅の余裕がないので、これらの資料の詳細を述べるができない。後段でのノート等の言及においては、その表紙に記載されているタイトルを用いる。また、()のなかの数字はページを示すが、ページ付けされていない資料については、私が数えたページを記すことにする。

って、『カール・メンガー主著「原理」第一草稿』⁷⁾ というタイトルのもとに、この書き込みを刊行した。しかし、1971年のウィーン会議ではハイエクはこのタイトルに賛同せず、「『原理』を特徴づける方法論的なアプローチ」がそこには見られないとした⁸⁾。また、この会議に出席した数学者カールは、彼の所持している1867-68年のノートに価値論についてのスケッチが含まれていることを明らかにした⁹⁾。おそらく、そのせいであろうか、近年散見するメンガー研究においても、マルガレーテ・ブースを例外としてこの資料は利用されることがほとんどなかった。しかし、1867-68年のノートを検討してみると、これらのノートとラウへの書き込みはほぼ同時におこなわれた相補的な草稿であることがわかる。メンガーはラウを彼の前に先行する経済学のテキストとして、その全体を自らの思考を鍛えるために用いたのであろう。

メンガーの経済学研究をはぐくんだいま一つのテキストは、ロッシェの『経済学の基礎』である。メンガー文庫には、メンガーの豊富な書き込みのあるその第5版が保存されている。しかし、ラウ『原理』への書き込みが1867年9・10月という日付をもっているのに対して、ロッシェへのそれは日付をもっていない。しかし、メンガー・ペーパーズの初期ノートの一つである「翼あることば」(Geflügelte Worte)と題された大判ノートには、ロッシェの『基礎』の最初の部分のテーマにあてられた数十ページが含まれている¹⁰⁾。

しかし、『原理』準備期のメンガーについて、「日記」がもたらす主要な情報は、彼のジャーナリスト活動にかんしてのものである。本節冒頭の引用は、『原理』執筆期だけでも、メンガーがジャーナリストとして3紙に関係したことを示している。メンガーは、学窓を去った1863年の夏以来、ジャーナリズムの世界に入り、ウィーン大学で講義資格をとったあとも、しばらくは(1875年

7) C. Menger [1963]. 以下では、「ラウ評注」とよぶが、ページ数表記もこの刊行版にしたがう。また、Kauder [1965], p. 87 を参照せよ。カウダーは、メンガーの「発見」が1869年であると述べているが、その根拠はあきらかでない。

8) Hayek [1973] p. 6.

9) K. Menger [1973], pp. 44f.

の1月末まで) 学者とジャーナリストの二足のわらじをはいていた。これまでメンガーの『原理』成立に関する伝承のなかでは、メンガーは政府発行紙であった *Wiener Zeitung* で市況報告の執筆に携わっている際に、経験豊かな実務家の意見と伝統的な価格理論とのくいちがいにうたれ、それがメンガーを経済理論の革新に向かわせたのだという¹⁰⁾。「日記」の中の年誌風の記述のなかに、関連のありそうな箇所をさがしてみると、1866年の「三月はじめ」に、それまでメンガーが加わっていた *Wiener Tagblatt* 紙が政府の所有に移行したので、メンガーは政府紙 *Wiener Zeitung* にも関係することになっている。そのさい、メンガーはその経済面の主筆になった。しかし、「9月末？」には、この職を去ったとしているので、先の伝承のようなことが実際にあったとすれば、この間のことであろう。

政府の言論取締りの緩和とともに花開いた1860年代のオーストリア・ジャーナリズムのなかでのメンガーの活動を検討することは、なお多くの準備を要する将来の研究課題である。しかし、「日記」における備忘録風の断片的な記載をのぞくだけでも、その活躍ぶりは驚くべきものである。この時代のメンガーはまだ20代の青年にすぎないが、各紙の編集への彼の参画は、けっして補助的な地位でのそれではない。「1865年10月ないし11月」に、メンガーは新しい新聞を創刊する許可を得るために当時の宰相ベルクレディを訪ねている。ベルクレディは、この若いジャーナリストに立憲主義の確立にむけての彼の腹案を披瀝している(7)。宰相の日からみても、メンガーはすでにそれだけ有望なジャーナリストだったのであろう。

ヴィーン文化の華である文芸方面においても、青年メンガーは無関心ではなかった。1865年には小説を3本かいているが、経済学に没頭する直前にも喜劇の執筆に手をそめ、また1868年にもさらに1本の小説をものしたようである。おそらくそれらは、彼の関係した新聞のために書かれたのであろうが、内発的な情熱がなければできないことではない。多忙なジャーナリスト活動のあいだの

10) Wieser [1929], S. 116; Hayek [1934], p. XI.

束の間の閑暇の時期のメンガーを捉えていたものは、経済学ばかりではなかったのである。

メンガー・ペーパーズのなかにある「翼ある言葉」という大判ノートは、この時期のメンガーの関心の推移を語る資料である。その最初のページは、タイトルどおりにアリストファネスやハイネの詩句でうまっているが、少し進むと詩や演劇を対象とした美学的考察が開始され、想像的な概念の考察をへて、次第に形而上学的考察に向かう。否定や抽象といったことの意味から、形・空間・時間といった基本的カテゴリーにおよぶ著作を、彼は一時は本気で考えていたようである。経済学はこのノートでは、ようやくその45ページ目から現われる。はじめは、ロッシェの『経済学の基礎』の冒頭の小節1から12までをとりあげながら、人間の目的、財、価値、経済などについての考察をおこなっている。40ページ近いこの考察の中頃に「1867年8月9日」という記載(52)がある。さらに進むとロッシェとはほとんど無関連に、価値、資本、生産、分業などについての考察が続く。その中には、1867年9月13日の *Neue Freie Presse* 夕刊への言及(111)がある。そして最後に、この論文の後の段で説明するような図による価値論の試みを含む考察(156-199)が終わり近くまで続いている。このノートから推測できることは、青年メンガーはジャーナリストから上昇して、独立した作家になろうとしていたが、ロッシェの経済学のいくつかの概念の検討をきっかけにして経済学に本気で参入するようになった¹¹⁾、というような経過である。

いま一つ、『原理』を生んだメンガーの経済学研究は彼の大学での学習と関係はなかったのかという問題がある。「日記」の年誌のなかにはブラーク大学

11) ドイツの経済学とメンガー『原理』の関係の近さについては、Streissler [1990], Silbermann [1990], また、池田 [1990] も論じている。Tribe [1988] によれば、ラウの教科書は、19世紀全体を通じてドイツ語圏経済学文献に看取されるスタイルを創始したという。

12) Streissler [1990] は、メンガーがブラーク大学在学中に、Peter Mischler の講義をきき、そのときのノートが『原理』の執筆に役だったのではないかと推測している。メンガーがブラハで聴講したのがミュラーの講義だったのは事実だが、「日記」には、いま一人の国家学教授 L. Hasner の名前が出ている。

時代の記載もあるが、そこに出てくる人名を講義課目と結びつけるには、現地で調査が必要であろう¹³⁾。1866年秋に *Wiener Zeitung* を去ったメンガーは、学位試験に挑戦し、翌年8月にクラカウ大学で学位を取得する。「日記」にはその際の試験勉強の内容についてはふれられていないが、カウダーが一橋大学メンガー文庫にあるクドラーの経済学教科書への書き込みはこの時期に由来するのではないかと推測している¹³⁾ことをつけ加えておこう。

「日記」によれば、学位論文を終えたメンガーは、1867年の5月には弁護士修習生の経験もつんでいる。ジャーナリズムに復帰するか、官界での出世を望むか、法律家になるか、文筆家になるか、あるいはアカデミズムに入るか、1867年半ばのメンガーはその人生の岐路に立っていた¹⁴⁾。

III 1867-68年の探求

それでは、1867-68年におけるメンガーの理論探求はどのようなものであったのか。まず留意しておいてよいことは、メンガーは、スミス・リカードらの古典派経済学との直接の対決から探求を開始したのではなく、ロッシャーあるいはラウといったドイツ人の著作を経由して経済学の探求に入っていたということである。この頃のドイツ語圏の経済学書の一つの特徴は、市場経済を前提して商品とその価格にすぐ入るのではなく、財と人間との関係という財論 (*Lehre von Gut*) を置くことである。それは、現在の経済学書でしばしば本論に入る前におかれているような、経済学の対象についての断わり書きのようなものではない。それは、財の有用性（使用価値）とその評価を論じるものであり、人間とその外部世界のかかわりについての一種の経済哲学的な考察を含

13) Kauder [1961], [1962], [1965]. なお, Streissler [1990] は、メンガーは学位試験にさいして経済学をとっていないとしてカウダーの推測を否定する。

14) 同じ頃カールの二人の兄弟も同様な岐路に立っていた。兄マックスは、実業および税務関係の弁護士をしながら、新進の自由土義者として政界に進むチャンスがうかがっていた。学位取得においてはカールよりも早かった弟アントンは、法律家への道を歩んでいたが、ヴューン大学の民事訴訟法のポストが空いたという話をきいて、学者への転身を計画していた。(Grünberg [1908], Yagi [1990])

むものである。それは、美学の考察から人間の想像力の作用について考究していた文学青年メンガーを経済学に導きいれた通路でもあった。

1871年の『原理』では、財論は価値論や交換論・価格論とは別の章になっている。しかし、1867-68年の探求では、それらは截然とは区別されず、財を論じるなかでその価値評価や交換・価格についての議論もあらわれている。それは、1867-68年期のノートが探求過程での覚書であって、系統だてて執筆された原稿ではないことのあらわれであるが、しかし同時に、ドイツ経済学書の通例では、財論は、多くの場合、そのうちに財の生産・分配・消費を含んで、経済学の概論そのものでもあったことを想起しなければならない。むしろ、財論・経済財論・価値論・交換論・価格論と一步一步進んでいく『原理』の長いアプローチのなかで見失われがちな、メンガーのフレッシュな洞察がそこにはあらわれているかもしれない。

A) 財把握の重層構造

人間の欲望満足とそれに役立つ財という財論のいかにも即物的な組合せがなぜ、メンガーをひきつけたのであろうか。その理由は、おそらく、メンガーが財論のこの組合せのなかに、人間の行為の目的論的な関連と、人間と外界の存在論的な因果連関を同時にみてとったからであろう。

「異なる言葉」のなかでメンガーの考察が開始されるのは、「人間の目的に役立つものをわれわれは財とよぶ」(46)という財の定義からである。財をどのように規定すれば、当然、それは目的に対する手段ということになる。財の価値は、こうした行為論的な見地からは、「一物が手段として目的に対してもつ意義の認識 (Anerkennung der Bedeutung welche ein Ding als Mittel zum Zwecke hat)」(69)である。これは、あきらかに、「経済行為をする人間の目的意識にとって一財が有する意義」というロッシャーの価値概念¹⁵⁾にしたがったものである。しかし、この目的論的な関連は宙に浮いたものではない。

15) Roscher [1864], S. 6.

それは同時に、財によって自らの欲望を満足させることが、人間の外界に対する依存関係という存在論的な基礎をもち、人間自身の生命維持の必然性のなかであらわれてくる認識である。財論の目的論的な把握の基礎には、人間と外界という存在論的領域における因果論的な連関があるのである。「翼ある言葉」のある箇所(108)には、欲望・財・欲望満足という財論のトリアードに、目的・手段・目的の達成という行為論のそれと、人間・外界・生命維持という存在論的なそれが重なった、三重のトリアードの図式が記されている。こうした重層的な視点からの財把握ということが、メンガーの探求を始発から特徴付けるものである。

こうした重層構造的な財把握は、メンガーの思考に次のように反映している。まず、財と欲望の関係をただたんに欲望とそれを満足させることのできる財の性質を客観的に対応させるにとどまらず、この関係の認識、および、財の現実的な支配という、主観的＝主体的な契機を重視したことである。メンガーにとって問題は、人間の生命維持にとっての外界への依存関係が、どのようにして特定の欲望満足の特定の財に対する依存関係に転化し、またそのようなものとして、財の意義＝価値が認識されるか、ということだった。

次の文章は、メンガーの経済学研究の本格的開始を告げる「ノート1」での「理論的」メモの最初の部分であるが、ここでも財論を客観から主観へという運動のなかでとらえようという志向を看取できる：

「われわれがその中に生き、したがって全般的関連にある、全体としての外界に対する依存関係。外界の諸部分に対する依存関係、あるいは、それらが特定の関連のなかにもちきたらされなければならない諸関係。こうした目的のためには、それらの諸部分は特別の性質を有していなければならない。人間の欲望をそれらが満足させる（目的に役立つといっても同じ）かぎりでは、それらの物は財とよばれる。しかし、これは一般的な表現法（性能）にすぎない。現実には財となるためには、それらは現実に役立たなければならない。すなわち、占有下にあることで、それによってはじめて、

客観的なモメントが主観的なものになるのである。」(76)

人間の外界に対する依存関係を、その主観的＝主体的な領域において把握するとすれば、それは財の存在量(『原理』の用語では「支配可能量」と欲望の大きさ(同じく「需求(Bedarf)」)との数量関係によって変動することを見逃すことはできない。「われわれの[…1語解説できず…]数量に対する依存関係は、存在量と欲望の比率(供給される商品と需要の比率)によって、つねに変動する。」(85)これは、「ラウ評注」では、「数量法則(Quantitätsgesetz)の影響」(3)とよばれているが、「ノート1」にもこの認識が存在している。泉の所有者にとっての水の価値は、水にどれだけの需要があるかによってきまってくるのであって、需要が湧出量にくらべて少ないかぎりはまだ同然なのである。したがって、「価値は、われわれの満足の、ある財の使用に対する依存関係である」(79)と規定できるにせよ、それはけっして財に内在する固定的な量ではない。

財に対する人間の依存関係についてのこのような認識からメンガーは、客観的な固有の尺度が価値に関してありうるという見方を拒否した。メンガーは、ここでもロッシャー、ラウ¹⁶⁾にならって、価値を財への依存関係の評価(Schätzung)の結果にほかならないとみている。しかも、この評価というのは、欲望満足の直接の評価ではなく、財相互の比較においてあらわれるものである。「人はみな、自分の欲望満足の依存関係の合度を、彼がそれに依存しているところのモノに帰属させることによって、比較することができるし、またそのようになる。」(「ノート2」(17) また、「異なる言葉」(132)も参照せよ。)これは、メンガーが価格や貨幣論を考えはじめた段階で、さらに明瞭な姿をとる。

(「価値は計測されるのではなく、評価されるのである。したがって、価格のなかにその評価はあらわれるが、付随的な事情によって著しく歪められている。」「ノート7」(14))

メンガーは9月18日の日付のある「ノート2」(16-20)で、はやくも「自分

16) Roscher [1864], S. 11, Rau [1863], S. 68.

の価値理論」を要約しようとしている。そこには、上述の依存関係としての価値論、比較＝評価、そして数量関係による依存関係の変動が論じられているが、「社会」にとっての依存関係によって市場価格を説明するという考えを直接的に並列させたために、いまだ混乱した叙述になっている。メンガーはたしかに、ロッシェーなどのドイツの経済学者たちによって、財および財価値の主観的な把握に導きいれられた。しかし、ドイツの経済学者たちは、イギリス古典派に対抗して、社会経済あるいは国民経済レベルでの恣意的な価値概念も創出していた。この段階のメンガーは、そこから生じた混濁から完全には脱しきれていないように思える。メンガーが自分自身の価値論の直観を精製してとりだすためには、なお、なんらかの整理が必要だったようである。

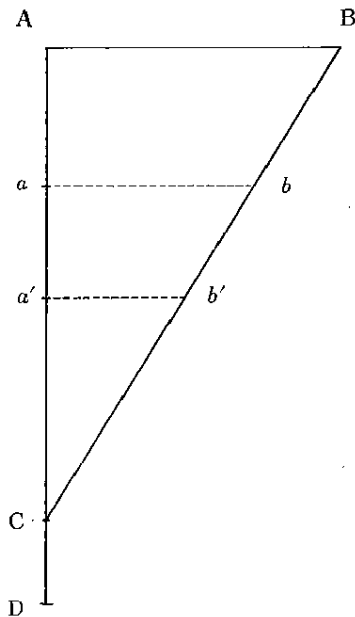
B) 価値概念の整理

カウダーの提供した「ラウ評注」には、抽象的価値、具体的価値、個体的価値、類価値といった様々な価値概念があらわれている。私は、それらの箇所は、メンガーが価値概念を整理しながら、財の「価値」として問題とされる「依存関係」を特定して、限界的な評価（いわゆる限界効用論）にもとづいた価値理論に到達していった軌跡のように思える。メンガーはその際、逆三角形状の図を数度もちいた。カウダーは、それを彼の論文で紹介しているが、その反響はほとんどなかったように思われる¹⁷⁾。しかし、この逆三角形は、「翼ある言葉」に数十ページにわたってあらわれるだけでなく、1867年の10—11月にはじまる「ノート7」「ノート9」「ノート10」にも頻出している。しかも、「ラウ評注」のなかでも2回ほどみられる（「価値においては、あらゆる財種類に、▽があてはまる。」(54)「ここに、▽がやってくる。」(96)）ように、文章のなかに出てくることすらある。この図を除くならば、この時期のメンガーの理論探求の半ばを失うことになりかねない。私は、この逆三角図は、『原理』の有名な効用の度盛表の前身であるだけでなく、メンガー理論の形成

17) Kauder [1961], [1962].

にとって不可欠な役割を果たした概念図であったと思う。

この図が、もっとも単純な形で示されているものとしては、次の解説付き図がある：



「ABC は1人の人間の欲望の全範囲を示している。欲望度盛 (Bedürfnisskala) を下総にいけばいくほど、大事ではなくなる、すなわち、質的により重要でなくなり、最後は、絶対的にも相対的にもイコール0になる。いま AC を先の人物の蓄え (….) とすると、財数量 Aa は欲望量 ABab を、財数量 aa' は欲望量 aba'b' を、そして a'C は欲望量 a'b'C をカバーする。つまり、欲望量は Aa, aa', a'C に依存しているが、そのさい留意すべきことは、 $Aa < a'C$ であつたとしても $ABab > a'b'D$ となりうるということである。」(156)

図 1

説明から明らかなように、この三角形の縦軸 (AC) は財の支配量であり、横軸は対応する財にかかっている効用の増減分 (限界効用) である。ABC が直角三角形として描かれているこの図の場合は、斜辺 BC を逡減する限界効用曲線とみなしてもよい。

この逆三角図は、もし、財がみな同質であるとすれば、重要度にしたがった財の用途によって、輪切りのようにして分割されることがある。たとえば、農民がその収穫から、まず自分の生活のための分をとり、次に下僕の分、さらに家畜の分というように、分けていく場合 (「ノート 7」(19)) である。しかし、

いま一つは、財とそれで満足させる欲望の種類ごとに、三角形を縦に割いていくやりかたである。「ラウ評注」でメンガーが問題にしている、ラウの「類価値」(Gattungswert)は、図示するとすれば、このように縦に分割された逆三角形になるであろう。「類価値にあっては、一方で一財の性質をその数量を無視して想定し、他方で、その個性を無視して人間の欲望が想定される。(量的ならざる)財に対する(量的ならざる)欲望満足の依存関係が、そのようにして考察されるのである。」(33)

しかし、メンガーは、現実の人間の行為を支配しているのは、このような「類価値」ではない、と考える。「現実の生活においては、具体的な財と具体的な欲望があるだけ」(33)なのであり、個々の財に対するこうした現実的な依存関係は、現在どれだけの財数量を支配しているかを知らなければ、確定できないのである。メンガーはそれを、「効用性の量依存関係」(Nützlichkeit-Abhängigkeit vom Quantum)にもとづいた「個別的価値」(individueller Wert) (29) とも呼んでいるが、それは、図上では、財=欲望の種類ごとに分割された逆三角図のなかの、一定の深さに対応した一定の欲望満足(「具体的価値」(34))になる。しかし、それを横幅として抽象化した表現が「効用性」(Nützlichkeit)なのであり、それに数値表現を与えれば、『原理』の効用度盛表である。

C) 欲望満足の最大化

かの逆三角図が、効用曲線、あるいは効用の度盛表にほかならないとすれば、それを用いて、欲望満足の最大化を論じることができる。「ノート7」では、「経済行為(Wirtschaften)」を説明した箇所(18)があるが、そこではこの逆三角形(あるいはその部分)の面積を欲望満足量とみなして、欲望満足最大化のための行為が論じられている。まず、第一(A)には、「既存のものを最もうまく充用することによって最大の価値量をカバーする」ことであるが、いま一つは「最も重要なものを生産する」ことであり、それには「労働をつうじ

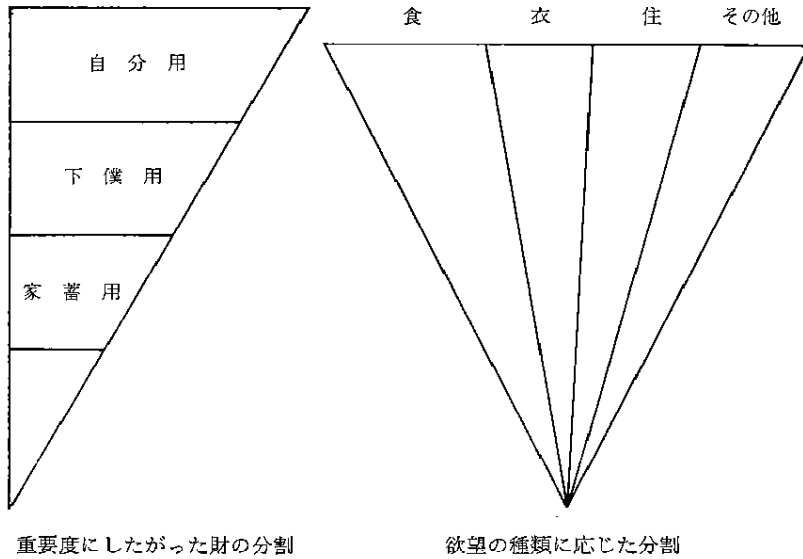
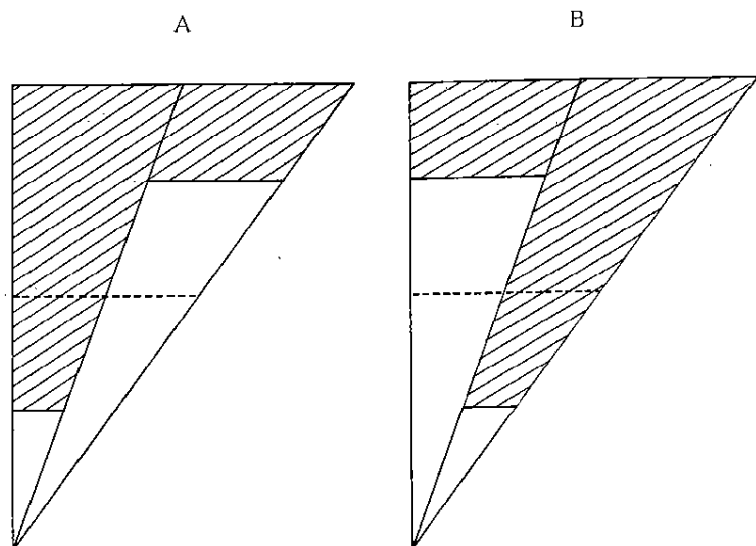


図 2

て」のやり方(B-1)と「交換をつうじての」やり方(B-2)の二つがある。

既存消費財のもっとも効率的な配分(A)については、説明の必要はほとんどないだろう。単一の逆三角形図であらわせれば、もっとも幅の広い上の底辺から出発して、順次下に向かうように財を配分していけばよいのであり、また、各種類の欲望ごとに分割された複合逆三角形図の場合には、その財の配分量をあらわす縦軸の縮尺が同一であるとすれば、分割された各三角形のなかでの、限界的な財配分に対応する幅が等しくなるように各用途ごとに財を配分していけばよい。明瞭な文章による定式化はみあたらないものの、通常、限界効用均等の法則とよばれる極大化条件はメンガーの図のなかにすでに含まれている。

生産による欲望満足最大化(A-1)においては、メンガーは労働の不効用というゴッセン=ジェヴォンズの考えはもっていない。かわりにあるものは、



A, Bの交換による欲望満足の最大化

図 3

少しあいまいな、しばしば貨幣ターム（フロリン）であらわされるコスト概念である。「もし彼〔＝生産者〕が、沢山生産し過ぎるならば、彼はコストの方で損をするであろう。」(20) それでは、生産量を決定するのはコストであろうか。事実、メンガーは、67年11月21日の日付のある「ノート9」で、「コストは、（市場のために）生産される量を決定するにすぎない。そして、この量が価格を決定する。」と述べている。しかし、メンガーのコストの理論は十分には展開されず、費用がどのように生産量を決定するかについては不明である。

生産における価値の扱いについては、「ノート7」のなかで、「生産それ自体もその（経済的）価値を（愛着的な価値ではなく）、その生産物をつうじて有するのである。もっとも、その生産物が、人間の欲望満足（目的実現）に役立ち、同時に（どの生産も外部から発しているのだから）大きな需求をカバーするかぎりにおいてであるが。」というメモがある。これは、帰属理論として

『原理』にうけつがれるものであるが、コスト理論の方は消失する。ひとつの可能な推測は、先の引用で市場向けに生産される量に言及しているように、この段階でのメンガーは、社会全体をとった価値論・価格論（「公共価値論 (öffentlicher Wert)」）が、メンガー本来の個人主義＝主観主義価値理論と平行していたのではないか、ということである。

次に、「交換」による満足極大化である。先述の「経済行為」の区分の箇所(18)では、二つに分けられた逆三角形を用いて一方の欲望満足に偏っていた交換前の状態と、双方にバランスよく配分された交換後の状態を対比して、相対的に多い方の財を交換に出して少ない方の財を獲得することによって、欲望満足を示す面積が増加していることが示される。これは、一人の交換主体についての図であるが、同じ「ノート7」の(71-73)では、A、B二人の交換主体についての逆三角形図を並べて、交換により「両者ともに増加した価値面積をうけとり」、均衡した最適財配分が可能になることを指摘している。メンガーは、この図にしたがって、交換の前後のAとBの価値面積の比を計算して、交換による便益がA、B両者に等しい割合であらわれる条件を確認しようとしている。こうした試みは、『原理』では放棄されており、また、1867-68年のノート群のなかでも、価値は個人的なものであり、固有の価値尺度をもたず、財相互の比較にあらわれた評価行為の結果でしかない、という基本的な観点と背反しているように思える。図形を幾何的に活用しようとしたあまりの勇み足というべきであろう。

D) 需要曲線から価値論へ

ところで、メンガーは、このような図形の使用にあたって、ラウからヒントを得た可能性がある。ラウは、その『原理』の付録として、縦軸に価格、横軸に需給量をとって、需要曲線・供給曲線の交差によって価格の形成と変動を説明する図をつけている。ここでは、右下がりの需要曲線が直線の場合と曲線の場合と2本ひかれ、供給の側も、供給量一定の垂直線と右上がりの曲線の2本

が描かれていた。メンガーは、「ラウ評注」(234-236)でこの図の検討のあとを残しているだけでなく、「ノート5」でもこの図に言及し、「ラウ形式上正しい」と記している。

メンガーの図は、これまで説明したように、それ自体としては、財の数量を縦軸に置き、横軸を欲望満足度とした効用曲線である。しかし、この横軸は、価値(あるいは「価値強度(Wertintensität)」「ノート7」(93))といわれたり、またフロリンという貨幣タームであらわされる(「ノート7」(20))こともある。その場合には横軸は価格軸となっているのであり、逆三角形図で実際には需要曲線があらわされている箇所もみられる。そのようなことを念頭において次のような文章を読むと、『ヴィーナー・ツァイトウング』時代のメンガーの発見というのは、結局、市場価格を決定する需要曲線の背後に逡巡する欲望満足(限界効用理論)を置いたことに帰着するのではないかと思われる。

「価格は同じ場所等々にいるすべての人にとり、彼らの欲望に大小があっても、ほとんど同じである。誰でもが、欲望を満足させるためにこれから生産されなければならない財に対して最高の価格を支払わなければならない—しかし、誰もまた、最も弱い購買者(最小の購買力=購買意欲)でも支払える最低の価格を支払えばすむことによるこんでいる。価値理論においても同様である。」(「ノート7」(12))

価格理論の領域においては、メンガーは「原理」同様に、売り手独占の場合からはじめる。独占的な売り手は、右下がりの需要曲線(メンガー図では、逆においた直角三角形の斜辺)のもとで、利潤を極大にするように価格が決定する(「ノート7」(20))のである。しかし、供給の背後にあるコストについては、先に指摘したように、はっきりしたことが述べられていないし、また、競争の作用についても議論は完成していない。

1867-68年のノートには、さらに貨幣や資本をめぐる考察も含まれる¹⁸⁾が、

18) メンガーの1867-68年期の思索は、さらに貨幣論・資本理論などにもおよんでいるが、そこにおいても基礎をなしているのは、本節で説明したような財論・価値論の見方である。なお、Kauder [1961], [1962] をも参照せよ。

上記では価値論を中心としてこの段階のメンガーの思索を紹介した。それを概括していえば、次のようになるであろう：メンガーは、個々の具体的財とその支配に依存する欲望満足の関連を特定して限界効用理論にもとづく価値論の基礎を確立している。しかし、高次財・低次財といった財の列次関係の概念が欠如しているために、帰属理論は萌芽にとどまっている。交換による欲望満足の最大化は論じられているが、市場での需給均衡についての考察はみられず、価格形成については、独占者による決定から競争者の登場による限定という方向が示唆されるにとどまっている。いいかえれば、財の列次関係による帰属理論の展開と、独占から競争へと進む価格理論の展開が次の段階の課題となったのである。

微妙な問題をふくむのは、この段階にあらわれた生産と費用の理論をどう理解するか、ということである。なぜなら、帰属理論に還元されない費用理論がメンガー本来の発想であるとしたら、メンガーは供給について独自の理論をもちえた可能性があるからである。しかし、これについては資料の精査がなお必要である。いま一つ関心をひくのは、メンガーに需要関数があるかどうか、という問題である。先に、メンガーの逆三角形図とラウの需要曲線の関係を述べたように、メンガーは需要曲線と供給曲線のクロスによる価格決定の構図を知らなかったわけではない。しかし、限界効用理論から再度需要関数にもどったかということ、私には疑問が残る。『原理』においても、価格はクールノ、ワルラスのように市場均衡を達成するパラメーターとしてはとらえられず、それぞれに欲望満足を最大化しようとする経済主体間の競争（「価格闘争」）の結果として把握されているからである¹⁹⁾。

19) 『原理』公刊にいたるまでの謎の一つは、1867—68年期に重要な役割を果たした逆三角形図の消失である。比やグラフを用いた「数学的表現」がこの時期にすでに放棄された形跡があるという数学者メンガーの発言（K. Menger [1973], pp. 44-45）は、私の調査結果とはくいちがう。私の推測は、数学的素養の不足がこの「数学的表現」を活用することを妨げたのではないかと、というところにおちつく。最大化の手法に不可欠な微分法の知識が欠けていたということだけでなく、関数的な思考法になれていなかったのではないだろうか。グラフを利用しようとした場合には、彼は比と面積という幾何的手法にたよろうとしているが、それは基数的効用を拒否する彼が

IV 『原理』の構想の発展

1867年9月以降に記入され「理論的復習 (Theoretisches Repertorium)」と題された大判ノートは、項目別に様々な経済学書からの定義風の抜粋を書き留めるようにしたものだが、メンガーはこの作業にはじめから著作をおこなうつもりでとりかかったようである。「理論的復習」というのは、一般に、ドイツ・オーストリアの大学で、本講義のあとに試験勉強としておこなわれる復習の機会やまたそのための教材をさしている。おそらくメンガーは、オーストリアの大学生向けの適切な復習書がないことに目をつけて、自分の勉強もかねてそうした出版をすることから、アカデミズムに近づく可能性を考えたのであろう。

その第一ページには、次のようなプランとメモが記されている：

「6/9 67 プラン

序文と緒論

1. 財の本質, 交易を考慮せずに
2. 財の成立
3. 財の交換
4. 交換価値の成立
5. 財の分配
6. 交換価値の分配
7. 財の消費
8. 交換価値の消費

本は、主としてオーストリアからとった注 (Notize) をもたらし、上記の対象に限定して、450 ページを超えないものでなければならない。人口学は、それが財の世界に直接にかかわってこないかぎりには、除外される。」

＼の本来の立場と背反するものであった。すでに獲得された概念的連関を補助的に示すだけであれば、(関数的関係の表現であるグラフよりも)、経験と対応させて数値例をあげていくだけでこと足りるだろう。もちろん、そのさい、数値的表現は便宜的なものであることをことわる必要があるが。

この最初のプランの特徴は、第1に、全体としてドイツ経済学的な財論の枠組みのなかにあること、第2に、財と交換価値が三度にわたって平行してあらわれていることである。「細目プラン」をみると、第1章の「財の本質」には、「1. 自然における人間の位置 2. 法＝権利の分岐 3. 価値 4. 財 5. 諸目的の調和 6. 経済 7. 資産 8. 富（相対的） 9. 評価（絶対的）（手段の目的に対する関係にしたがって）」という小区分がなっている。第2章は、自然の産物・労働生産物・生産手段・分業・労働生産性などを並べた生産論であるが、資本・知性・資本生産性などがあげられている第4章「価値の成立」との関係はあいまいである。第3章「財の交換」は「1. 交換 2. 価格 3. 供給・需要 4. 貨幣 5. 客観的価値〔価格のこと？〕」からなる。分配論では、財の分配の章に地主・労働者・企業家・資本家を配し、価値の分配の章には、これらの諸階級に対応する収入諸形態、地代・労賃・資本利子・企業家利潤を配しているが、不可分なものをこのように2章にわけて論じるのは実際には不可能であろう。また、最後の消費論については、財の消費章の方に、消費・奢侈という項目があるだけで、価値の消費章の方はイメージすらもできていない。

初期の構想としては、いま一つ、「翼ある言葉」の（161）に、次のような簡単なものがある：

「 目次 緒論 A. 個人としての人間

序文 緒論

依存関係 支配

欲望—財—満足 目的—手段の実現に同じ

欲望論 / 財論 / 満足論 / 価値論（意義 論理的）

経済論 労働 補助手段

B. 社会の一員としての人間 」

ここでは、人間を個人としてみるか社会の一員としてみるかが区別されている。こうした区別をおこない、ひとまずは、前者の考察に専念することによっ

て、前節で指摘したような価値概念の混乱が消えていったのではないだろうか。

次に、日付はないが、「文献A 15の後」と記されたノートには、用語や構成の点で1871年の「原埋」に近づいた以下21項目からなる「I 財の理論一般について (Zur Lehre vom Gut überhaupt)」というプランがある：

- 「1. 財の本質 2. 因果的連関 3. 諸法則 4. 法則
5. 時間・偶然・誤謬 6. 需求と支配数量 7. 経済・経済財
8. 非経済財 9. 経済財と非経済財の関係
10. 経済財がそのもとに従う法則 11. 価値の本質 12. 価値の一般的法則
13. 価値の差異 14. 価値の差異に関する法則 15. 交換
16. 財交易の単純な形態 17. 交換の限界 18. 価格の本質および形成
19. 交換価値・使用価値 20. 経済的価値 21. 資産・富」

そして、最後は、1870年11月20日の日付のある大判紙の二つ折り見開き4ページになるプランである。これはいま示したばかりのプランとよく似ているが、より詳細である。しかし、ここでは細目は断念して章だけを示すにとどめる。

I 財の本質 II 諸財の因果的〔あとから赤鉛筆で「目的論的」と修正〕連関 III 財性質に関して財がしたがう法則 IV まとめ V 人間の欲望〔あとから鉛筆で消されている〕 VI 需求と支配財数量 VII 経済と経済財 VIII 非経済財 IX 経済財と非経済財の関係 XI [X] 財がその経済的性格に関してしたがう法則 XII 資産 XIII 財価値の本質と起源 XIV 価値に関する法則 XV 価値の大きさの差異 XVI 価値の差異に関する法則 XVII 経済的交換の基礎 XVIII 経済的交換の限界 XIX 交換取引における価格形成と財配分 1 孤立的交換 2 独占における価格形成 XX 双方の側での競争 価格形成 XXI 交換価値 XXII 商品 XXIII 貨幣 XXIV 铸貨

このプランの特徴は、財論という枠組みの放棄の他に、欲望論の存在と、価格形成論の整備、さらに、商品・貨幣・铸貨章の登場である。1871年の『原

理』では、欲望論はなく²⁰⁾、章が整理されて全体として8章になっている。細目をも考慮して、初版『原理』の章別構成と1870年プランの照応を考えると、およそ8—9割方は一致している。また、『原理』で付加されたもの²¹⁾も、本質的なものとは思われない。

『原理』と「1870年プラン」の対応関係（〔 〕が「1870年プラン」）

第1章 財の一般理論 § 1〔I〕, § 2〔II〕, § 3〔III〕, § 4〔IV〕, § 5,
§ 6

第2章 経済と経済財 §§ 1-2〔VI〕, § 3〔VII, VIII, IX, X〕, § 4〔XI〕

第3章 価値の理論 § 1〔XII〕, § 2〔XIV〕, § 3〔XIII, XIV, XV〕

第4章 交換の理論 § 1〔XVI〕, § 2〔XVII〕

第5章 価格の理論 § 1〔XVIII〕, § 2〔XIX〕, § 3〔XX〕

第6章 使用価値と交換価値 〔XXI〕

第7章 商品の理論 §§ 1-2〔XXII〕

第8章 貨幣の理論 §§ 1-3〔XXIII〕, § 4〔XXIV〕

V 方法論的立場

最後に、1867-68年の時期のメンガーが、その経済学の探求にあたって、どのような方法論的な立場をとっていたか、を見てみたい。1871年以降のメンガーの関心のかかなりの部分が、方法論の探求に向けられたことを知るものにとつては、それが、『原理』の準備期からの自然な発展とみなしうるかどうか、という問題を避けてとおれないからである。

まず、複雑な諸現象をその究極の要素に還元しそこから出発して再構成する

20) K. Menger [1923] S. IX によれば、1871年の『原理』の原稿では、財論の前に1・2ページの欲望に関する記述があったが、校正のさいにメンガーはそれを取り除いた、とのことである。

21) 表からあきらかなように、初版『原理』第1章の第5節の「人間の福祉増進の原因について」、第6節「所有財」は「1870年プラン」との対応が不明であるが、これらは長いものではなく、人間の福祉を高次財を含む財支配からみるここでの記述が、1870年段階の原稿のどこかに既に含まれていた可能性はおおいに考えられる。

というやり方をメンガーが意識的に実現しようとしていたことは、まちがいないであろう。たとえば、「ノート10」には、次のような初版『原理』序文をおもいおこさせる文章がある。

「私が努力してきたことは、人間の経済の学説を、どこでも、その究極の根拠にまでひきもどし、それをこえてる誘惑、また、経験科学に保障された人間の認識をこえてる誘惑を、細心の注意をはらって避けることであった。」(8)

メンガーにとって、「人間は、すべての経済の出発点であると同時に到達点である。」(「ノート10」(16))しかし、経済行為を欲望とその満足という観点に限定して眺めるのは、人間観として適当であろうか。歴史学派の経済学者たちがイギリス経済学を攻撃するさいに用いたこうした議論にたいして、1883年のメンガーは、自利の追求というのは、現実の人間を動かしている動機の一つにすぎないが、経済学の理論体系を成立させるためには必須の出発点であると答えた。1867-68年のメンガーの方法論の理解は、実質的にはそれに近いが、論争の場に直接いないせいか、よりナイーブである。というのは、彼は次のように、「利己主義」を、悪い意味の「利己主義」ではないということに力点をおいて弁護しているからである。

「営利の努力、既存の営利機会の活用は、倫理的な性格にとって破壊的ではない。非倫理的なのは、他人を犠牲にしたその活用だけである。」(「ラウ評注」(14))「われわれの科学は、人間がその欲望を満足させる能力についての学説である。利己主義(Egoismus)は、それ自体としては、悪い意味で解されているのではない。……私は、利己主義を(人間に唯一の)原動力として[…一語解せず…]提示しているのではなく、単に自分の欲望を可能なかぎり満足させようとする努力として提示するのだ。」(「ノート18」)

自由と法則が両立するかという、方法論上のいま一つのトピックについてはどうであろうか。これは、一橋大学にある初版『原理』への書き込みの中で主

要なテーマとされた問題であるが、1867-68年の時期のメンガーは、この問題に切実な関心を示しているとは見えない。もちろん、財と人間の関係において、行為論的（目的論的）見方と存在論的（因果論的）見方を重層させて保持しているメンガーにあっては、自由と被決定性の問題は内在的問題である。しかし、1867-68年のメンガーは、人間の外界への関係と目的の手段への関係をいずれも依存関係として平行させて考えており、〈自由〉あるいは〈自由意思〉という問題は登場していない。その背後には、因果的な過程において「認識された原因」が行為する人間にとっては「手段」として合目的な連関のなかに配置される（「ラウ評注」（7, 19））ことが、暗黙のうちに想定されているからであろう。

財論・価値論において、初版「原理」準備期のメンガーは、たしかに、ドイツ経済学の子²²⁾であった。しかし、ドイツの経済学者たちが、イギリス古典派の批判と結びつけていた、「利己主義」批判、また「自由意思」による決定論批判、といった議論については、彼はまだ切実な関心を示していない。この領域での本格的な探求が開始されるのは、『原理』公刊以降になる²³⁾のである。

1871年になると、メンガーは、刊行直前の『原理』をもとに、ウィーン大学での講義資格を獲得しようとする。ロレンツ・フォン・シュタインは、『原理』の実物を見せるように要求した。5月にはすでに5ボーゲンのゲラが、7月には16ボーゲンのゲラが出ていた。メンガーは、「序文」を草するとともに、ロッシャーに『原理』を献じる許可を求める。ロッシャーは、それを受け入れた（「日記」（12, 14））。

REFERENCES

Alter, Max [1990], *Carl Menger and the Origins of Austrian Economics*, Boulder Co.: Westview Press.

22) この点で、本稿は、Streissler [1990] と池田 [1990] の主張を裏づけたことになる。

23) この経緯については、私は八木 [1988] 42-48ページでおこなった推測をまだ維持している。なお、「日記」では、1874年12月から翌年の4、5月まで方法論の著作にとりかかっていたとの記載（18）がある。

- Barnett, Mason [1990], "The Papers of Carl Menger", in: Caldwell [1990].
- Boos, Margarete [1986], *Wissenschaftstheorie Carl Mengers*, Böblau, Wien.
- Caldwell, Bruce (ed) [1990], *Carl Menger and his legacy in economics*, Duke University Press, Durham and London.
- Grünberg, Carl [1908], "Anton Menger", *Biographisches Jahrbuch und deutscher Nekrolog*, Bd. 11.
- Hasner, L. v. [1860], *System der politischen Oekonomie*, Bd. I., Prag.
- Hayek, Friedrich A. [1934], "Carl Menger", *The Collected Works of Carl Menger*, ed. by F. A. Hayek, Vol. 1, Series of Reprints of Scarce Tracts in Economics and Political Science, vol. 17, London School of Economics and Political Science.
- _____. [1973], "The Place of Menger's Grundsätze in the History of Economic Thought", in: Hicks/Weber [1973].
- Hicks, J. R. and Weber, W. (eds) [1973], *Carl Menger and the Austrian School of Economics*, Oxford.
- Kauder, Emile [1961], "Freedom and Economic Theory", *Hitotsubashi Journal of Economics*, Sept.
- _____. [1962], "Aus Mengers nachgelassenen Papieren", *Weltwirtschaftliches Archiv*, 89.
- _____. [1965], *A History of Marginal Utility Theory*, Princeton, N. J.
- Kudler, J. [1846], *Die Grundlehren der Volkswirtschaft*, 2 Bde., Wien.
- Menger, Carl [1871], *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre*. Erster, allgemeiner Teil, Wien.
- _____. [1923], *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre*, 2. Aufl., aus dem Nachlass herausgegeben von Karl Menger, Wien.
- _____. [1961], *Carl Mengers Zusätze zu "Grundsätze der Volkswirtschaftslehre"*, Bibliothek der Hitotsubashi Universität, Tokyo.
- _____. [1963], *Carl Mengers erster Entwurf zu seinem Hauptwerk "Grundsätze", geschrieben als Anmerkungen zu den "Grundsätzen der Volkswirtschaftslehre" von Karl Heinrich Rau*, Bibliothek der Hitotsubashi Universität, Tokyo.
- Menger, Karl [1923], "Einleitung des Herausgebers", in: C. Menger [1923].
- _____. [1973], "Austrian Marginalism and Mathematical Economics", in: Hicks /Weber [1973].
- Milford, Karl [1988], *Zu den Lösungsversuchen des Induktionsproblems und des Abgrenzungsproblems bei Carl Menger*, Wien.

- Mischler, Peter [1857], *Grundsätze der National-Oekonomie*, Wien.
- Rau, Karl Heinrich [1863], *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre*, 7. Aufl., Leipzig.
- Roscher, Wilhelm [1864], *Die Grundlagen der Nationalökonomie*, 5. Aufl., Stuttgart.
- Silbermann, Paul [1990], "The Cameralist Roots of Mengers Achievement", in: Caldwell [1990].
- Streissler, Erich [1990], "The Influence of German Economics on the Work of Menger and Marshall", in: Caldwell [1990].
- Tribe, Keith [1988], *Governing Economy—The Reformation of German Economic Discourse 1750–1840*, Cambridge.
- Wieser, Friedrich [1929], "Karl Menger", *Gesammelte Abhandlungen*, hrsg. v. F. A. Hayek, Tübingen.
- Yagi, Kiichiro [1990], "Max Menger's Liberal Position", paper presented at the 17th annual meeting of the History of Economics Society, June 23–25, Lexington, VA.
- 池田幸宏 [1990], 「メンガー『国民経済学原理』の学史的位付けについて」、『三田学会雑誌』82巻特別号-I。
- 馬渡尚憲 [1988], 「カール・メンガー文書」、『経済評論』1988年8月号。
- 八木紀一郎 [1983], 「オーストリア学派創始者達の関係資料の現況」、『岡山大学経済学会雑誌』, 14巻3号。
- _____ [1988], 『オーストリア経済思想史研究』, 名古屋大学出版会。